慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トーマス・ロバート・マルサスと彼れの所謂「経済学上の新学派」
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.1 (1935. 1) ,p.1- 39
JaLC DOI	10.14991/001.19350101-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾塾長
經濟學博士
小泉信三著

アダム・スミス・マルサス・リカアドオ
―正統派經濟學研究―

菊判四六八頁
別刷寫眞十頁
背・角クロース裝函入
定價二圓八十錢
送料內地三十三錢

新刊

アダム・スミス、マルサス、リカアドオは正統派經濟學の三人の建設者である。スミスは體系の礎石を、マルサスは其柱人口の原理を、そしてリカアドオは價値、分配論の屋根と壁とを附加へた。それは百餘年前の建築ではあるが今猶ほ斷然其存在を主張する。今日吾々が新しく經濟理論を進めんとするならば、是等巨匠の「肩に乘つて」始めなければならない。本書は著者多年の正統學派研究の想華である。彼は前著岩波文庫リカアドオ「經濟學及課稅之原理」解題に紙數の制約上述ぶる所足らざるを憾とし、特に其讀者の閲讀を期待して居る。著者の豐なる學殖文藻は今更茲に喋々する迄もない。其麗筆に展開せられた此古典經濟學の華篇こそは大方の必讀すべき好著である。

京一 京ッ 神橋 田通
岩波書店
振替東京 二六二四〇

三田學會雜誌　第二十九卷　第一號

トーマス・ロバート・マルサスと彼れの所謂「經濟學上の新學派」

高橋誠一郎

一

トーマス・ロバート・マルサスが心臟の疾患の爲めにバス附近のクラヴァトンなる其の妻の父の家、セント・カザリンスに於いて急死したのは、恰度今から一百年前、即ち一千八百三十四年十二月二十九日の月曜日であつた。彼れは其の死に先立つ數日前、彼れと會合するが爲めに招待せられた其の子女並びに其の家族の他の人々と共に迎ふ可き樂しきクリスマスを豫想しながら、見かけは極めて達者相に、上機嫌で、外舅エッカーソール（Eckersall）を訪れるが爲めに倫敦を離れたのであるが、而も同地着後、間もなく、彼れが嘗つて自覺したことがなかつたと信ぜ

らるゝ心臟病に惱され、數日にして長逝したのである。(Bishop Otter's Memoirs of Robert Malthus, prefixed to the 2nd ed. of Malthus' Principles of Political Economy considered with a view to their practical application, 1836, p. xlii.)。金にはならぬが、而も光榮ある其の職に安んじ、より多くの收入を望み、より多く顯著ならんことを欲することなく、其の僅かなる富を分つて友人等を終日に欵待し、又英國貧民の幸福を目標として絕えず其の筆を執つてゐた平靜なる彼れの學究的生活は愛に終りを告げたのである。(James Bonar, Malthus and his Work, 2nd ed., 1924, pp. 424, 57.)。

屢々引用せらるゝマルチノーの言の如く、マルサスは「恐らく彼れの時代の最もよく惡口せられた人であつた」。然しながら、彼れは斯くの如き惡口が斷じて彼れの著作を讀んだ人々によつて發せられたものでないことを熟く知つて居つた。(Harriet Martineau, A History of the Thirty Years' Peace. A. D. 1815-46, IV, 1878, p. 77.)。洵に彼れは「何人も讀まずして、總べての人が惡口する」一書を殘したのみならず、(Bonar, op. cit., p. 3.)、彼れは又、リカードオ及びセイの如き偉大なる經濟學者によつても激しく論難せられた。殊に彼れはリカードオと最も深き友情を以つて交つたのであるが、而も「彼れ等が會合し、若しくは書信する際には、單に彼れ等の相違點を討論するが爲めにのみ會合し、又書信するの觀があつた」。而も、彼れ等の友誼は是れに由つて聊も害せらるゝことなきのみか、却つて「相異れる方法によつて勞作しつゝある競爭心の旺んな錬金術師の如くに、彼れ等は其の材料を相互の坩堝中に投げ入れて、等しき快感と利益とを看出したのである」。(Empson, Life, Writings, and Character of Mr. Malthus. —— The Edinburgh Review, Jan., 1837, No. CXXX. p. 470.)。而して餘りに屢々、近眼的な政策上の見解から彼れの計畫に對して放たれた不公平な忌はしい辭句に至つては固より彼れの傾着することのない定つ風のやうに彼れの側を通り過ぎた。(Malthus, An Essay on the Principle of Population, 3rd Ed., 1806, vol. II, Appendix, p. 530.)。彼れの上に浴せかけられた無數の罵詈讒謗も唯だ僅かに其の初めに苦痛を與へたに過ぎずして、二週間も經つと最早彼れの夢を煩すことがないやうに爲り、聊かたりとも彼れの溫雅な氣質や、其の沈靜にして、而も快活なる態度を損ふことがなかつた。(Martineau, op. cit., pp. 77-78 ; Martineau, Autobiography, 1877, vol. I. p. 211.)。

II

マルサスは一千七百九十八年、荒つぽく組まれた八折判三百九十六頁の論文「人口論」を提げて、初めて經濟論壇に登つた。然しながら、彼れは直接に經濟學者として其の初舞臺を踏んだ譯ではなかつた。『人口論』は經濟學に對する人心の等閑たるよりも、寧ろ當時の政治學的及び社會哲學的論爭への參加であつた。ホルランダー (Jacob H. Hollander) の所言の如く、『人口論』の基調たる「人口原理」は、一經濟學者の頭から充分に武裝して現れ出でたものではない。(Adam Smith, 1776-1926. Lectures to Commemorate the Sesqui-Centennial of the Publication of "The Wealth of Nations", 1928, p. 42.)。

モンテスキューの時代からして、政治的行動による「人類將來の改善」に關する推究は哲學的遊戲の一として愛好

せられて居つた。(ibid.)。モンテスキューは「獸類の牝は殆んど不變なる生殖力を有するも、人間的種族に在つては思惟の態樣、性格、欲情、氣分、我儘、美を保持するの念、分娩の苦痛並びに多數に過ぐる家族の煩勞は無數の相異れる方法に於いて繁殖を妨害する」と說き、(De l'Esprit des Loix, 1748, Liv. XXIII. chap. i.)、「往々にして氣候は土壤よりも更らに有利であつて、人民は增加し、又、飢饉によつて失はれる、斯くの如きは支那に於いて見る所である。斯くて父は彼れの娘を賣り、又、其の兒童を棄てる」と稱してマルサスの先蹤たると共に、(ibid., chap. xvi.)、スパルタの立法者リュクールゴス(Lycurgue)の精神に共鳴して、個人財產の平等化を說いた。(ibid., Liv. IV. chap. vi.)。

佛蘭西大革命の進展、政治的急進主義の擡頭と共に、人類將來の改善に關する問題は一層强く時人の注意を惹くに至つた。「人間は、今後、無窮にして且つ從來想像し得なかつた改善に向つて加速度を以つて前進するものであらうか、若しくは幸福と不幸との間を永久間に搖動するの運命を有するものであつて、あらゆる努力の後、依然として憧憬の目標を去ること遙かなる距離に殘存しなければならぬものであらうか」。(Malthus, An Essay on the Principle of Population, 1st ed., 1798, pp. 2-3.)。斯くの如き問題は屢々討論の好題目として取扱はれた。而して、人口過多、食料缺乏の脅威によつて、人間は無窮の改善に向つて進むことを得ざるものではあるまいかと云ふ考は既に一部の思索家の心胸に湧いて居つた。後年マルサスは、自己の呈示す可き最重要なる議論が確かに斬新なるものでないことを告げ、而して其れがロバート・ワルレス(Robert Wallace)によりて、其の Various Prospects of Mankind, Nature and Providence, 1761. 中に開陳せられ、本問題に適用せられたことを認めてゐる。(Malthus, Principle of Population, op. cit., p. 8. 昭和七年版拙著『重商主義經濟學說研究』六七六—八頁參照)。唯だ彼れはワルレスが、之れを其の適當なる重味を以つて、若しくは最も有效なる見地に於いて行はなかつたものと做し、(ibid.)、而して彼れの如きすら、地球の全面が菜園の如くに耕作せられ、更らに是れ以上毫も收益の增加を爲し得さるに至るまでは、這般の原因よりして一定の困難の發生す可きことを覺知せるの觀なきを非とし、自己の論文中に示された立論の見解が正しいとするならば、困難は決して遠い所に在るのではなくして、切迫せるものであり、即時のものであることを主張したのである。(ibid., pp. 142-143.)。而も、ウイリアム・ハズリットは其の A Reply to the Essay on Population, by the Rev. T. R. Malthus. In a Series of Letters. To which are added, Extracts from the Essay; with notes, 1807. に於いて、ワルレスの書中より長き引用文を揭げて、兩者の原理並びに是れより導かれた斷案が正確に同一であると看做してゐる。彼れ曰く「或る人が特殊の發見若しくは觀察を爲せる最初のものであり、而して他の者が、是れよりして、前者が全然覺知することのなかつた重要なる推論を引くと云ふことは屢々起る所である。然しながら、斯くの如きは現在の場合に該當するものではない」と。(The Complete Works of William Hazlitt, ed. by P. P. Howe after the Edition of A. R. Waller and Arnold Glover, vol. I, 1930, p. 194.)。

マルサスの『人口論』を喚び起した The Enquirer: Reflections on Education, Manners and Literature, in a Series

of Essays, 1797. の著者ウイリアム・ゴッドウィンの如きも亦、其の大著 Enquiry concerning Political Justice, and its influence on Morals and Happiness, 1793. に於いて、既に人口增加、生存資料の缺乏が新たなる社會の幸福を阻止す可しと做すの點に注意を拂はなければならなかつた。然しながら、彼れは自ら斯くの如き難問を解決し得たと信じたのである。(ibid., vol. II, pp. 861, 871. 昭和四年版拙著『經濟學史』八二—三頁參照)。

而してコンドルセーの如きも同じく、其の死後の出版 Esquisse d'un Tableau Historique des progrès de l'esprit humain, 1793. に於いて、後年マルサスによつて更らに鋭敏にして更らに執拗なる形態に於いて提起せられた問題を豫知して居つた。科學及び產業の進歩と共に、此の世界は更らに大なる食料の定量を生じ、斯くて又、更らに大なる人口を支持するに至らしめらるゝは疑ふ可らざる所であるが、而も此の地球の住民の增加が生存資料の增加を凌駕し、順次に痛烈なる苦難なくして生ぜしめらるゝことの出來ない廣く傳播せる不幸、若しくは人口減少の何れかを來す可き時が到來しなければならぬのではなからうか。然しながら、コンドルセーは、斯くの如き時が何時かは到來しなければならぬとしても、そは必然頗る遠い年代に於いてゞなければならず、又、其の間に於いて人類は確然、吾人が現在に於いて殆んど何等の概念をも形成することの出來ない知識と開明の程度に到達するであらうと考へた。彼れは問ふた、何人か、他日、元素を變じて人間の使用に適する實體たらしむるの術によつて爲され得可き所のものを敢て豫想せんとするかと。而して縱し人口が結局、自然によつて冷酷に此の地球上に置かれた斯くの如き限界に到達したとしても、コンドルセーは絕望することを肯じなかつた。蓋し人々は幸福且つ安樂に世界の住民を維持するに必要なる高に食料の生產を制限するによつて這般の困難に對應し、又之れを回避し得可きが故である。斯くてマルサスが再び注意を甦らせやうとした墮胎及び殺兒の殘忍野蠻なる方便によつて過剩人口を減少するの必要は存せざる可きである。(ibid., neuvieme epoque. 前揭『經濟學史』八三—四頁參照)。

ゴッドウィンは主として人心の內面的發達に信を措き、コンドルセーは技術及び科學の外界的發達に望を懸けた。(Bonar, op. cit., p. 23; Robert H. Murray, Studies in the English Social and Political Thinkers of the Nineteenth Century, vol. I, 1929, p. 10.)。彼れ等が異れる道から到達した中心の學說、即ち人間の成全性及び行政的虛無主義は既に四分の一世紀以上も前から攻擊せられて居つた所のものである。人口對食料の問題が第十七、八世紀の論者の注意する所と爲つて居つたことは、吾人が前揭『重商主義經濟學說研究』中に叙述せるが如くである。(特に其の第四編第四章參照)。洵にホルランダーの言ふが如く、後期の政治的理想主義者等が單に市場の珍しくもない反對論として之れを評論したほど社會更新の計畫に對する這箇「人口原理」の適用は日常普通のものと爲つて居つた。實に「人口原理」(the principle of population)なる名稱すらアーサー・ヤングによつて、其の Political Arithmetic, containing Observations on the Present State of Great Britain; and the Principles of her Policy in the Encouragement of Agriculture, 1774. の第六十一頁に於いて、又、ゴッドウィンによつて其の Political Justice, 1793. の第二卷第八百六十頁に於いて使用せられた所である。「マルサスは、研ぎすまされはしたが、而も是れまで知らるゝことも、又用ひらるゝこともなかつたと云ふ意味に於いて新しいものではない武器を採つて試合に參加し

たのである」。(Hollander, op. cit., p. 44.)。

三

マルサスの『人口論』が一千七百九十八年に初めて現れた際には、それはどちらかと云へば輕い著作であつて、經濟學上の勞作たるよりも、寧ろ政治上の論難文であつた。彼れが同書再版の序文に於いて自白せるが如く、『人口論』初版は、ゴッドウィンの Inquirer に刺激せられて、地方の在所に於いて彼れの手近かに存した僅かな資料から著されたものである。其の著作から彼れが此の論文の主要なる議論を形成する原理を導き來つた著者は、ヒューム、ワルレス、アダム・スミス及びプライス博士の外にはなかつたと稱せられてゐるが、(An Essay on the Principle of Population, a new edition, very much enlarged, 1803, p. iii.)、固より是れには其の論敵ゴッドウィン及びコンドルセーの二人を加ふ可きであらう。而して彼れは其の經濟學上の議論に於いては、殆んど總べての點に於いてアダム・スミスと一致するものであつた。而して彼れが、賃銀を以つて人口の變化によつて支配せらるゝものと看做すよりも、寧ろ人口若しくは勞働者數を以つて賃銀の變化によつて支配せらるゝものと看做すスミスの意見と說を異するに至つた時、彼れは自說に就いて疑惑を感じなければならなかつた。而して彼れは此の點に於いてスミスを呼ぶに「此の政治界に於いて著名なる人」(A person so justly celebrated in the political world.) を以つてしてゐる。(Principle of Population, 1st ed., p. 302.)。

『人口論』初版は決して著者が多年思索の成果ではなかつた。彼れは固と人類及び社會の成全性に關する其の父ダニエルとの論戰の武器として、既に一般に認められて居つた人口原理を使用したに過ぎなかつた。(昭和九年版『經濟學史』所收拙稿『近世英國經濟學史』三七〇頁參照)。彼れが是れより先き一千七百九十六年に著し、出版者デブレット(Debrett)をして出版せしめんとして得なかつた其の最初の小冊子 The Crisis. A View of the Present Interesting State of Great Britain, by a Friend to the Constitution. に於いては、彼れが猶ほ未だ其の人口の原理を看出さなかつた事實を十分に立證する言辭を以つて、ホイッグ黨的立場から其の當時審議中の救貧法案を支持してゐる。彼れ曰く、「人口の問題に關してはペーリィ副監督(Archdeacon Paley)と一致することを得ない、彼れ曰く、あらゆる國に於ける幸福の量は人民の數によつて最も善く測定せられると。增加しつゝある人口は一國家の幸福と繁榮の最も確實なる記號であるが、現實の人口は單に過去の幸福の記號たり得るに過ぎぬ」と。「苟も扶助を受くる境遇を快きものたらしめて、然らずんば獨立に自己を支持し得可き者を誘惑するが如きは斷じて希望せらる可きではないが、而も絕對に自活し得ざるが如き其の成員を扶養するは社會の義務なるが故に、斯くの如き場合には、之れを受く可き人々に取つて最も快き方法に於いて援助を與ふ可きことが慥かに望ましい」。斯くて彼れはピットの法案中に提唱せらるゝが如き三人以上の兒童を有する父に對して許與せらる可き特殊の救助を稱讃し、又、救貧院外の救恤を唱道してゐる。(Empson, op. cit., p. 482.)。

マルサスは『人口論』初版以後に於いて、政治論者から經濟學者に轉じた。彼れが學者として、又思想家としての生活は一千七百九十八年以後に於いて始まるものである。此の年代から一千八百〇三年に至る間に於いて、彼れは

廣く歐羅巴を旅行し、到る處に彼れの主題を擁護す可き事實を集めた。彼れは初版出版の後に於いて初めて、古くはプラトーン及びアリストテレースの時代に於いて、近くは佛蘭西重農學派の或る者によつて、又、時々モンテスキューによつて、而して英國の著者中に在つては、フランクリン博士、サー・ジェームズ・スチュアート、アーサー・ヤング並びにタウンセンド等によつて人口問題が論述せられたことを發見して、此の問題が更らに多く公衆の注意を喚起することのなかつた事實に當然驚きを感じなければならなかつたのである。(Principle of Population, 2nd ed., op. cit., p. iv.)。然しながら、彼れを以つて觀れば、人口が常に生存資料の水準に抑壓せられなければならぬことは判然記述せられて居つたのであるが、而も斯くの如き水準が生ぜしめらる可き種々なる方法に就いては、殆んど何等の研究も行はれなかつたのである、而して此の原理は未だ曾つて其の歸結まで十分に追求せられたことがなく、又社會上に於ける其の影響に關する嚴密なる檢討によつて示唆せらるゝの觀ある實際的推論は之れよりして引かるゝことがなかつたのである。(ibid., pp. vi-v.)。

四

マルサスは一千八百〇三年の『人口論』新版に於いて、幾分當初の結論を改修し、倫理的抑制を强調し、各人に晩婚の風を鼓吹するに至つた。即ち彼れは同版の序文中に於いて曰く、「此の著の全部を通じて、余は前版とは原理上著しく相違し、嚴密に罪惡若しくは不幸の孰れの項目にも屬することのない人口に對する他の防止を可能と想像するに至つた、而して、後の部分に於いては、余は第一論文の最苛酷なる結論の或るものを和ぐるに努めた」と。(ibid., p. vii.)。吾人は今、本稿に於いてマルサス『人口論』初版及び再版の要旨を摘記し、其の相違點を明示しやうと企圖するものではない。(前掲拙著『經濟學史』八七―一〇三頁參照)。然しながら、爰に一言しなければならぬことは、若し此の有德なる自制の原理が存するとしたならば、バヂョット(Walter Bagehot)の所說の如く、彼れは最早コッドウィンに應答することなく、成全性の夢を破るものでないと云ふことである。「若し其の人數を限定することが完全に有德なる共同體に取つて可能であるならば、彼れ等は恰も彼れ等があらゆる他のものを遂行すると等しく這般の義務を遂行するであらう、其處には村落共同體を破壞す可き確實なる原理は存することがない、そは其の人數を其の食料に適應せしむることが出來、而して永遠に存續するを得可きである。其の最初の形態に於いては『人口論』は一個の議論としては確定的のものであつて、單にそは眞ならざる事實の上に基かしめられたに過ぎない。其の第二の形態に於いては、そは眞なる事實の上に基かしめられたのであるが、而もそは一個の議論としては不確定なるものであつた」。(Economic Studies, by the late Walter Bagehot, ed. by Richard Holt Hutton, 1880, p. 137.)。

マルサスは、獨身時代に於ける倫理的抑制の義務が是れまで如何に不完全に履行せられて來たかを知るが故に、此の點に關し將來に於いて頗る重大なる一定の改善を期待するは慥かに幻想的であると思惟した。然しながら彼れは吾人が其の子女を給養し得るの見込を有するまで此の時期を延長するの義務に關しては有利なる一定の變化の生ず可きことを希望するは決して幻想に耽るものではないと考へた。(Principle of Population, 2nd ed., op. cit., pp.

597-598.)。而して彼れは過去の社會狀態を現在と比較して、人口原理より結果する害惡は增加せずして、却つて減少せることを言明しなければならなかつた。(ibid., p. 603.)。

然しながら、マルサスは終にゴッドウィンの道に赴くことを得なかつた。英國に於ける勞働階級の運命が產業革命の進展と共に漸次悲慘の度を加へた時、アダム・スミスによつて力强く主張せられた自然的自由の制度は、之れを補充し、之れが條件たる可き平等に對する要求を喚起した。ゴッドウィンの渴仰の中心は常に平等であつた。而して平等主義は彼れと共に無政府主義に境を接しつゝある極端なる個人主義の一と爲つた。然るにマルサスに取つては、吾人が人間的天才の最高貴なる盡力の總べてを、——換言すれば、野蠻狀態から文明狀態を區別する一切の事物を、財產及び結婚法に、又、各個人を驅つて其の狀態を改善するに勉めしむる一見偏狹なる自愛の原理に負ふのである。(ibid., p. 604.)。實にバートランド・ラッセル (Bertrand Russell) が其の近業中に言ふが如く、マルサスは個人的利己心から發出する社會に對する利益を反復强調する。仁慈なる神の攝理が吾人をして悉く斯くの如き主我主義者たらしめたのは這般の理由に據るのである。然しながら、有益なる主我主義は特殊なる部類のものである。そは愼重、打算的且つ自制的なるものであつて、衝動的なものでもなければ、又無分別なものでもない。而してラッセルは以上の所言の後に、「マルサス自身は其の結婚後の最初の四年間に於いて三兒をあげたのであるが、其の後は一兒をもあぐることがなかつた。或る者は是れを以つて『倫理的抑制』に基くものと臆斷してゐる。マルサス夫人の人口原理に關する意見は記されてゐない」と云ふ贅言を附加してゐる。(Russell, Freedom and Organisation, 1814-1914, 1934, p. 100.)。而も、マルサスの所謂「倫理的抑制」は結婚の延期に在るものであつて、ロバート・オーエン及び新マルサス主義者の如く、產兒の制限を指すものではなかつた。

マルサスを以つて觀れば、社會の機構は、其の重要なる特色に於いて、恐らくは恒久、變化することなくして殘るものであらう。吾人はそが恒に所有者の階級と勞働者の階級とから成立するであらうと信ず可きあらゆる理由を有する。然しながら、各々の狀態並びに彼れ等が相互に對して有する割合は變じて、著しく全部の調和と美とを改善するに至る可きである。マルサスは自然科學の視界が日々擴大しつゝあるに反し、倫理及び政治科學が狹隘なる限界內に制限せらるゝことを認めてはゐるが、而も彼れは、吾人にして怠る所がなければ、吾人は確信して、人類の德と幸福とが著しく自然科學上に於ける發見の光輝ある發展の進みによつて動かされ、而して其の成功に參加するであらうと云ふ希望を肆にするを得可きであると考へたのである。(Principle of Population, 2nd ed., op. cit., p. 604.)。ゴッドウィン及びコンドルセーは貧富間のあらゆる差別が一掃し去らる可き日を期待したのであるが、マルサスは單に中層階級の數的增加を企圖しつゝあつたのである。絕對人口の增加は固より生ずるであらうが、而もそは明かに人口原理より結果する害惡が將來に於いて猶ほ一層減少せらる可しと做すの希望を鈍すに資することの殆んどないものであらう。(ibid., p. 603.)。

マルサスがスミスの思想中の陰慘たる方面を特出せしめたことは疑問の餘地なき所であるが、而も吾人は彼れを呼ぶに悲觀論者を以つてすることを愼まなければならぬ。彼れは『人口論』初版以來、究極に於いて寧ろ樂觀論者で

あつた。（前掲拙著『經濟學史』九二頁參照）。而して其の再版に於いては、明かに人口原理より生じつゝある諸害惡の緩和に關する吾人の將來の見込が全然吾人をして落膽せしむるものではなく、又、斷じて人間社會に於ける漸次的累進的改善を排除するものでないことを言明してゐる。（ibid., pp. 603-604.）。マルサスはコンドルセー及びゴッドウィンの意見中に於けるユートピア的部分を拒否したのである。彼れは無限なる進歩と其の限界が定限せられない進歩との間に區別を設けなければならぬと考へた。（Principle of Population, 1st ed., p. 170.）。人間は漸次愈々善く教導せられ、斯くて又、生存資料の增加によつて人口の增加を調節することを學び、而して彼れ等が家族を支持し得ることを確信せしめらるゝまで之れを構成することを待つに至る可きである。然しながら、コンドルセーは恰も同一の事を言ひはしなかつたか。ゴッドウィンが一千八百〇一年に其の Thoughts occasioned by the Persusal of Dr. Parr's Spital Sermon. に於いて、マルサスの觀察は決して彼れの理論を破壞するものではなく、却つて之れが確證たるものであると稱した時、彼れは果して誤つて居つたであらうか。（ibid., pp. 73-74.）。（Elie Halévy, The Growth of Philosophic Radicalism, trans. by Mary Morris, pp. 243-244.）。而して一千七百九十八年八月二十日附ゴッドウィン宛マルサスの書翰に據れば、『人口論』初版出版の直後、其の若き著者と親しく會見して、人口に對する防止として「愼重」を說いたものは實に彼れゴッドウィン其の人であつたのである。（C. Kegan Paul, William Godwin: his friends and contemporaries, 1876, vol. I, p. 323.）。

マルサス以後に於いて、彼れの理論の確實性に對する制限は彼れ自身が想像することなく、又、想像し得なかつたほど重要なるものと爲つた。農業技術の改良は彼れが可能と考へた所よりも遙かに重要なることを示した。歐羅巴が其の穀物を亞米利加に於いて作ることはマルサスが單なる戲言と思惟した所であるが、交通機關の發達は遂に之れを實現する至つた。加之、生活標準の向上に連れて出生率下降の傾向あることも亦、之れを認めなければならぬ。斯くの如き事實は恐らくマルサスの所論を否定するものではあるまいが、而も其の理論の重要性を破壞したものと言はなければならぬ。第十九世紀の進みに於いて世界は終にマルサスの當面した問題の解決を目擊することがなかつたのであるが、而も其の延期を見たのである。人口過多、食料缺乏の困難は、少くとも文明國民の間に於いては、かのワルレスの觀たるが如く、遠き將來に屬するものであり、又、吾人は、ゴッドウインの說くが如く、依然として人口增加を續けつゝある長き未來を有し得可きものであらう。

五

マルサスの人口理論は正統派經濟學者の殆んど總べてが受け容るゝ所と爲つた。人口法則はあらゆる所要の推論を容易に演繹し得る經濟科學の究竟前提の一と看做さるゝに至つた。（前掲拙著『經濟學史』二一八、二二六頁參照）。リカードオは人口學說の上に其の分配理論を建設した。就中、彼れの生存費賃銀說はマルサスの人口原理を基礎として確說せらるゝに至つた。直接賃銀學說の發達に與へたマルサス『人口論』の貢獻は極めて尠少であつたが、而も其の間接の影響は深大であつた。彼れは賃銀の決定原因として生活の標準を注意した。人口は、生活の標準によつて設けられた限界內に於いて、生存の上に迫るの傾向を有するものである。（Principle of Population, 2nd ed., op.

cit., p. 557.)。而して勞働の供給、延いては又、其の賃銀を以つて純然たる生存費に依存するものと見ずして、可變的なる生活の標準に依存すると做す可變的生存費説は直ちに一般經濟學者の承認を受くるに至つた。（前掲『近世英國經濟學史』三七九頁參照）。生存費賃銀學説は又、フェルディナンド・ラッサルによつて「賃銀鐵則」として方式化せられた。ラッサルは、「自由學派其のものに於いても、此の法則を否認する名聲ある國民經濟學者の一人も存することがない」と考へた。「アダム・スミスもセイも、リカードオもマルサスも、バスチャもジョン・スチュアート・ミルも等しく之れを承認する點に於いて一致してゐる。爰には總べての學者の一致が行はれてゐる」。（Offeness Antwortschreiben an das Zentral-Komite zur Berufung eines Allgemeinen Deutchen Arbeiter-Kongresses zu Leipzig, 1863——Ferdinand Lassalle's gesammelte Reden und Schriften, verlag. von Wolff und Höhne, II Band, S. 36-37.)。

而も斯くの如き學説は一般經濟學者の間に於いて、今日の文明諸國に在つては實際の事情と適合せざるものとして排斥せらるゝのみならず、社會主義者の間に於いても其の承認を失つた。一千八百七十五年に發表せられた獨逸社會民主勞働黨のゴータ合同綱領中には、ラッサルの賃銀鐵則が猶ほ採用せられてゐた。然るに、カール・マルクスは早く既に其の以前に於いて、ゴータ綱領に對し、又、ラッサルの賃銀法則に對して反對した。（Zur Kritik des sozialdemokratischen Parteiprogramms. Aus dem Nachlasse von Karl Marx. Neue Zeit, IX. Bd., I, 1890-1891, S. 561ff.)。而して一千八百九十一年のエルフルト綱領は遂に之れを否認するに至つた。

ベルンシュタイン(Eduard Bernstein)は曾つて所謂「賃銀鐵則」の運命を追想して下の如くに述べてゐる。此の法則の上に、當時ラッサルは其の煽動を基礎附けたのである。恐らく未だ曾つて斯くの如く確く、大なる熱情を以つて信奉せられた經濟學説は一も存在しなかつたであらう。久しく此の法則は近代の勞働者運動に對する合言葉(Schibboleth)であり、最も剛毅にして最も献身的なる戰士に其の奮鬪力を回復せしむる信條(Glaubensbekenntnis)であつた。然しながら、斯くの如き「法則」は存在することなく、其の基礎は非科學的であつて、吾人の綱領の中から消滅しなければならない時が斷然——私は不作法に略々斯く云ふことが出來る——來たのである。斯くて是れが爲めに悲む可き内抗を生じて、數多の勇敢なる戰士は新しい讀み方(Lesart)の前に兜を脱いで、之れを承認したと云ふ事實が眞であるとしても、吾人は之れを如何ともすることが出來ぬのである。今日に於いては此の「法則」は最早何等の力をも有せず、何人も之れを口にすることなく、遠く遠く、吾人の心胸を離れたのである云々と。(Wie ist wissenschaftlicher Socialismus möglich? 1901, S. 16.)。

マルサスの人口原理は決して現代の經濟科學に對して其の究竟前提の一たるものではない。

六

現代の經濟學はリカードオ及び其の流を傳ふる正統派經濟學者が無條件的に受け容れたマルサスの人口理論よりも、寧ろ彼れ等によつて承認せらるゝことのなかつた其の研究方法及び價値學説等に負ふ所が大であると稱さなければならぬ。（後に述ぶるが如く、リカードオ及び其の亜流は、マルサスを以つて觀れば、「經濟學の新學派」であ

つて、決して經濟學祖アダム・スミスの正統を傳ふるものではない）。

先づ彼れの方法に就いて觀る。

彼れの『人口論』初版は殆んど全く演繹的な論述から成る極めて不完全な著作であつた。然しながら、此の樂天的幻想を破壞す可き一般原則を提唱し、而して是れに由つて假設的將來を推究せる論文は、軈がて彼れをして過去及び現在の社會狀態に照して、其の提唱せる原則の效果を檢討せんとするの大努力を導いた。エドウィン・キャナンの語を以つてすれば、「最初彼れは單に其の成全性に關する彼れの父との議論の武器として人口の原理を使用した」。然るに彼れは『人口論』の出版以後に於いて、一意其のものゝ爲めに之れを研究した。（Cannan, A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848, 3rd ed., 1920, p. 133.）。而して彼れが其の『人口論』の改訂以後に取つた研究方法は著しく歸納的であつた。彼れの推理は直接、歷史的及び統計的事實に基いて居つた。過去及び現在に於ける文明及び未開の種々なる國々に於いて人口の發達を抑制しつゝある諸勢力を明瞭ならしむる文獻上の事實を蒐集し、比較した。彼れは年々の結婚數の人口に對する割合、相異れる國々に於ける結婚の生產率、出產、死亡及び結婚に及ぼす流行病の影響其の他に關して丹念なる統計的研究を行つた。唯だ吾人はマルサスが其の歷史的研究に入るに先き立つて既に其の根本的原則を表明せるものであつて、人口に關して系統的にして詳密なる論述を行はんとするの計畫は、前述の如く其の後思案であつたことを認めなければならぬ。然しながら、彼れが『人口論』改版と共に、直ちに、其の提唱せる一般原理の效果に對して歷史的檢討を行ひ、現實の狀態に關して經驗によつて保證せられたるの觀ある推論を引かんとしたことは、一般原理より推して特殊の場合を論ずる純然たる演繹的方法が經濟學の一定部門に在つては頗る危險であつて、經濟學者は絕えず其の理論を吟味するが爲めに現實に復歸するの義務ありと做す現代經濟學者の態度を表明せるものである。而して夙に、明確なる事實と經濟學者の結論との矛盾が所謂經濟學をして著しく不信用ならしめたることを認め、眞理が觀察と歸納とによつて得られなければならぬことを敎へたものは、實にヘイリィベリーの東印度學校に於けるマルサスの後繼者リチャード・ジョーンズ（Richard Jones）であつた。彼れはマルサスの人口論が無殘に濫用せられたことを認めなければならなかつた。（An Essay on the Distribution of Wealth, and on the Sources of Taxation, 1831, p. viii.）。

マルサスは彼れが全然具體界を取扱ひつゝあるものと思惟した。彼れは彼れが一個の抽象科學を建設せんとしつゝあるものであると云ふ考を毫も有して居らなかつた。而も、彼れが具體界の觀念は是れよりして構成せられ得可き最も便宜なる抽象と一致するに至り、斯くて又、彼れは其の意志に反して、抽象的經濟學の創始者の一人と爲つたのである。而して又、彼れが一般的供給過多の事實の實際に生じ得ることを信じたことは（Principles of Political Economy considered with a view to their practical application, 1820, ch. II. sec. ii. 參照）、偶々以つて、彼れが具體的方法に於いて經濟學を論ずるに必要なる實際的叡智、若しくは吾人が現今科學的方法と稱す可き所のものに於いて之れを取扱ふに必要なる抽象的觀念の完全なる把握を缺いて居つたことを示すものと看做された。「彼れは

兩者の不完全なる混合を試みた。思辨の霧が彼れの事實を覆ひ、事實の雲が彼れの觀念を包んでゐた」。(Bagehot, op. cit., p. 148.)。然しながら、這箇一般的生産過剰の問題に關しても、必ずしもジェ・べェ・セイ、リカードオ及びジェームズ・ミル正しくして、マルサス過れりとは斷じ得ざるものがある。

七

マルサスは又、其の價値學說に於いても著しくリカードオ及び其の直接後繼者と相違するものである。而して勞働價値學說の推除に終つた英國經濟學に於ける過程の端緒は、實に彼れに發するものである。彼れの意見を以つてすれば、交換價値の本原的原理、即ち最も適用廣き原理は供給及び需要の法則であつて、企業家費用の法則は第二原理たるものである。需要供給の大原理は、市場價格と等しく、スミスが自然價格と稱する所のものをも決定す可く作用せしめられる。生産費は、需要供給の支配的原理に從屬するに非ざれば、何等の效力をも有せざるの觀がある。(Principles of Political Economy, op. cit., p. 75.)。英國經濟學に於ける需要供給理論の歴史は、彼れの後に於いて、ミルを過ぎ、ケアンズ及びマーシャルを經て進展するものである。(前揭拙著『經濟學史』一七五—八頁參照)。

彼れは又、多くの效果を擧ぐることを得なかつたとは言ひながら、熱心に價値の尺度を探求し、是れに由つて經濟史、殊に一千七百九十年以後に於ける物價及び勞銀統計を解釋するの鍵を握らんとした。彼れは這般の問題に對するリカードオの懷疑と冷淡とを以つて、半ばは彼れが「歴史的精神」を有せざりし事實によつて說明せらる可きものと觀た。(拙著『經濟學史』一七八—一八五頁參照)。尙ほ又、彼れとリカードオとは、地代に關する說明の主要なる諸點の或る者に於いては一致するものであるが、(同書一五三—一六六頁參照)、他の諸點に於いては著しく相違する。リカードオに對するマルサスの異論は前者との書信並びに其の『原論』中に表明せられてゐる。

八

マルサスは一千八百二十四年一月の The Quarterly Review, No. LX. 所載 Essay on Political Economy. Supplement to the Encyclopædia Britannica. Vol. VI. Part I. Edinburgh: 1823. と題する書評に於いて、マッカラックの手に成れる『大英百科全書』所載『經濟學』の一項を批評してゐる。彼れの主要目的は、アダム・スミス及びマルサスの共れより對別せられたる經濟學の新學派(the new school of political Economy)と稱せらる可きものを特性附くる重要原理の或るものに讀者の注意を誘はんとするに存する。(ibid., Vol. xxx. October, 1823, & January, 1824, p. 305, p. 334.)。而して彼れの觀る所に據れば、殊に著しく此の學派を特性附くる重要原理は次ぎの三個なるが如くである。(一)諸貨物中に費されたる勞働の定量が其の交換價値を決定すること、(二)需要及び供給は、獨占の場合若しくは短期間に對する外は、價格及び價値の上に何等の影響をも有せざること、(三)アダム・スミスによつて明記せられたる原因、即ち資本の相對的夥多及び競爭を全然排除して、土地の上に於ける生産の困難を以つて利潤の調整者と做すことが是れである。(ibid., pp. 307-8.)。

マルサスを以つて觀れば、一貨物中に費されたる勞働は他のものと比較す可くも非ざる重要なる價値の成分たることを認めらる可きではあるが、而も若し眞實に他の諸成分が存し、而して是れ等のものが同時に本質的に生産を

奬勵し、若しくは阻害するが如き性質のものであり、斯くて又、富の進歩の上に力强く作用するとしたならば、單純化せんとするの欲望からして、是れ等のものに其の別箇にして適當なる重味を與へさらんとするは經濟學者に在つて宥され難き所なるが如くである。(ibid., pp. 308-9.)。著者は特に、勞働のみが生産に與り、而して收益が殆んど直接なる社會の初期に於いては、斯くして取得せられたる諸貨物の價値は是れ等のものを取得するが爲めに使用せられたる勞働の定量によつて決定せらるゝことを認めた。然しながら、社會のあらゆる階段に於いて、殆んど同樣の方法を以つて取得せらるゝ少數の貨物が存する、而して何等の利潤も與ることのない是れ等貨物の價値が正しく是れ等のものを取得するが爲めに使用せらるゝ勞働の定量によつて見積らるゝことが出來るとしたならば、吾人は斯くの如き貨物の價値を利潤が構成要素として入り込んだものゝ價値と比較するによつて、利潤によつて與へられたる附加的價値の公平なる計算を行ふことを得ときである。(ibid., pp. 309-310.)。例へば、現場に存する材料から建造せられた一つの有用なる石垣が、一日半クラウンを支拂はるゝ五十人の普通の石工によつて八日にして築造せられたとするならば、其の石垣が完成せられ、使用に適する時は、利潤の干與するもの頗る少量なるが爲めに、其の上に使用せられたる勞働、即ち四百日の勞働、若しくは貨幣を以つてすれば、五十磅以上を値することが殆んどないであらう。今、一定量の葡萄酒が初め樽に詰められた際には、正確に同一量の勞働及び貨幣を値するものと假定しても、而も其の使用せらるゝ以前に於いて二箇年間貯藏せらる可きであり、而して利潤率が一割五分であると假定するならば、該期間の終りに於いては、其の供給の條件が滿足せられ得るが爲めには、六十五磅以上に賣れなければならぬ、換言すれば、其の價値は四百日の勞働に非ずして、五百二十日以上でなければならぬことが明かである。(ibid., pp. 309-310.)。

然しながら、著者は曰く「資本の利潤は單に蓄積せられたる勞働の賃銀の別名に過ぎざるものである」と。(Supplement to the Encyclopædia Britannica, or Dictionary of Arts, Sciences and General Literature, op. cit., p. 263.)。而して若し諸貨物の價値が賃銀及び利潤に分解し得可きものであり、而して利潤が唯り賃銀の別名に過ぎざるものであるならば、全體が賃銀に分解し得可きものであることは、疑ひもなく眞實である。若し五が四の別名であるならば、二と二が五に等しかる可きことは、等しく眞實である。吾人は勞働の賃銀を以つて常に一定種の人間の努力に對して支拂はるゝ報酬を意味するものと解した、而して機械、原料若しくはあらゆる他種の資本中に費されたる蓄積勞働が恰も直接の勞働に等しき性質のものであつて、又、精確に等しき方法に於いて支拂はるゝことは確かである、然しながら、蓄積せられたる勞働と直接の勞働の兩者に對する利潤は全然別種の物であり、別樣の法則に從ふものである。斯くの如きはアダム・スミスによつて正しく且つ强く說かれてゐる。(Wealth of Nations, Bk. II. c. vi.)。リカードオによつて繰返し行はれたる極めて大なる讓步と修正とは現實の眞理に逢着するには足らないが、而も同一國に於ける同一量の勞働の產物が常に同一價値を持續すると做すの推定を破壞するに全然充分なるものである。諸貨物の上に與へられたる勞働の定量は其の相對的價値を調整すると做すの原則は、機械の使用に由り、又其の使用者に對する資本の收益の不平等なる速度に由つて共に著しく修正せられることが特に承認せら

れた。同一の讓歩はマルサスが爰に評論しつゝある著作中に於いても行はれる。賃銀が騰貴し、而して利潤が下降する時は、一大部門の貨物は交換價値に於いて下降し、他は昂騰し、而して第三のものは依然として同樣なる可きことが述べられる、(Encyclopaedia, op. cit., p. 265.)、而して稍や奇矯に、是れ等のものを悉く皆一纏めにして、斯くの如き變化にも拘らず、同一量の勞働の産物が常に同一價値を持續することを推定せんことが提言せられる。吾人にして若し一定期間中の穀物の一般價格若しくは一般利潤率を知らんと欲するならば、平均を取ることが結構であるかも知れぬが、吾人の目的にして穀物の價格に及ぼす季節の結果を確めんするに在る時は、同一の方法に依るは甚しく異樣の感あるを免れない、而して吾人の研究が同一量の人的勞働の産物の價値の上に及ぼす利潤の變化しつゝある定量及び變化しつゝある比率の結果を確むるに存する時、平均を取ることを提唱するは、吾人に取つて等しく不可思議なるの觀がある。其の尺度と看做さるゝ貨物中に費さるゝ高と比較せらるゝ種々なる貨物中に費さるゝ利潤の高に從つて變化しつゝある此の種の頗る顯著なる結果は、本項の著者によつて最も明白に承認せられてゐる。是等のものは、原則に對する例外の場合が、理論に於いても、又事實に於いても、原則が依然眞である場合よりも比較にならぬ程多數であることを明白に證明する。(The Quarterly Review, op. cit., pp. 311-3.)。

九

マルサスが考察せんとする第二の原理は、需要及び供給が獨占の場合若しくは短期間の外は、價格及び價値に對して何等の影響を有せずと做すものである。リカードオの確立せる總べての眞理の中で最も有用且つ重要なるものゝ一は、利潤は勞働に赴く全收益の部分によつて決定せらるゝと做すものである。土地の上に使用せられた勞働の生産性が持續的に減少しつゝある際には、勞働の穀物賃銀は勞働者を餓死せしむることなくして同一程度に於いて減少し續くること能はざるものであり、斯くて又、同一量の勞働の所産中より大なる部分が勞働に、より小なる部分が利潤に赴かなければならぬことを認むるは容易である。然しながら、吾人は經驗に徵して這般の原因の作用が引き續き久しきに亙つて、農業に於ける改良に由つて停止せらるゝことあるを知る、而して吾人は這般の原因から離れて、一定量の勞働の收益が勞働と利潤との間に分割せらるゝ割合を決定する所のものが何であるかを研究す可きである。這般の重要なる點に關し、此の『大英百科全書』中の論篇は說く所がない、而も一般に行はれつゝある意見に據れば、そは勞働に對する需要の大小に依存する。此の意見が正しいとしても、そは尙ほ利潤率が此の點までは需要供給原理の上に依存しなければならぬことを明かにするであらう。然しながら、そは經驗に徵するに、勞働よりも寧ろ收益(produce)の需要及び供給の上に依存するの觀がある。而して一定量の勞働收益のより大なるか若しくはより小なる割合を勞働に赴かしむる明白なる理由が、需要と比較せられた供給の一時的若しくは常規的狀態から生じつゝある這般の勞働の全收益の價値に於ける下落若しくは昂騰であることが看出さる可きである。吾人にして若し一定量の勞働の全收益の價値に關して言ふならば、勞働の生産性に於ける變化が如何にあらうとも、這般の命題は眞である、而も吾人にして若し利潤を決定するものとして一定量の收益の價値を考ふれば、吾人は勞働の生産性が依然として變化なき際に、需要及び供給の狀態に關して言はなければならぬ。(ibid., pp. 315-316.)。

アダム・スミスは極めて正當に、勞働が總べての貨物の本原的買入金であつたと言つてゐる。一定の諸貨物にして、願望の對象ではあるが、而も可成りに多くの盡力なくしては取得せられ得ないとしたならば、是れ等のものをかほどまで願望しつゝある人は彼れが必要なる勞働の犧牲を以つて是れ等のものを買ひ入るゝの力があり、又進んで買ひ入れんとしつゝあるや否やに由つて是れ等のものに對して或ひは有效需要を有し、或ひは之れを有せざる可きであらう、而して彼れが是れ等のものに對して與ふることを得、又進んで與へんとしつゝある勞働の定量は當さに彼れの需要の高として考へらるゝを得可きものである、他方に於いて供給は是れ等のものを取得するが爲めに適用せらるゝ勞働が取得し得る貨物の定量に依存す可きである。此の場合に於いて該物品の價値は需要に正比し、供給に反比す可きこと、即ち各々の物品は取得せらるゝ物品の高によつて使用せらるゝ勞働の高を除するによつて生ず可き勞働の高を値ず可きことが明かである。(ibid., pp. 316-317.)。

吾人は爰に收益が迅速であつて、又唯り直接の勞働のみが使用せらるゝものと想像したのであるが、而も或る貨物の收益は必然他の貨物の其れに比して著しく遲く、更らに又、其の生産の爲めに高價なる道具、又は一定形態の蓄積勞働を要するとしたならば、是れ等の諸貨物が、迅速に生産せられ、販賣せらるゝ貨物よりも、是れ等のものゝ中に費さるゝ人的勞働の定量と比較してより稀少にして、より價値大なる可きことは頗る確實ではあるまいか。此の場合に於いては、同一量の人的勞働によつて取得せらるゝ諸貨物の供給に影響しつゝある二個の原因が存す可きである、第一は斯くの如き勞働の生産性であり、第二は資本と呼ばるゝ蓄積の多寡並びに是れ等のものを使用するに必要なる時間である、而して直接勞働の一定量と比較せられたる斯くの如き貨物の供給は其の勞働の生産性と比例せざるに至り、單に使用せられたる資本の利潤を償ふに必要なる所のものを控除せる後に於いてのみ、其の生産性に比例す可きである。(ibid., p. 317.)。

其の需要が有效なる者に對する諸貨物の價値は、恰も是れ等のものゝ取得する供給と比較せられたる其の需要の高に比例す可きである。(貴金屬が使用せらるゝ文明社會に於いては、一定の需要は同一種類の勞働の一定量を支配す可き貨幣の可變的定量によつて恙なく代表せらるゝを得可きである、而もそは諸貨物の或る一定量によつて代表せらるゝことを得ない)。斯くの如きは一時的なると永續的なるとを問はず、總べての場合に於いて、又如何なる方法に於いて其の貨物が生産せらるゝとに拘らず適用せられ得る普遍的命題として考へらるゝを得可きである。貨物の價値は其の生産の諸費用によつて決定せらるゝと做す他の命題は種々なる點に於いて制限せられる。先づ第一に、そは必然利潤が原費の一部を形成すると做すの想定を包意するも、斯くの如き想定の當否は論爭せられた所である、第二に、そは常に諸貨物の平均並びに普通價値に關して言ふものであつて、其の現實並びに市場價値の變化に關して言ふものではない、又第三に、そは自由競爭によつて生産せらるゝ諸貨物に限られ、人々が感知するよりも更らに多數なる、嚴密なるか若しくは部分的なるか、自然的なるか若しくは人爲的なるかの獨占によつて影響せらるゝ總べてのものを排除する。然しながら、是れ等の制限を以つてすれば、此の命題は疑ひもなく眞であつて、這箇明白なる理由に因つて、想定せられたる事情の下に於いては、諸貨物の持續的供給の必要條件は需要、即ち是

れ等のものに對して提供せらるゝ勞働の高が其の原費、即ち是れ等のものを賣りに出すに要せらるゝ勞働及び利潤の高を償ふ底のものでなければならぬと云ふに在る。是れ等のものゝ價値は明かに長く是れよりも少なきことを得ない、而して競爭の自由なる際には、それがより大でなければならぬことは其の供給に取つて必要ではない。斯くて生産の原費によつて規制せらるゝと否とに拘らず、總べての貨物の價値は需要と比較せられたる供給によつて決定せられ、而して一定の需要は一定量の勞働によつて代表せられ得るが故に、其の價値を決定する這般の需要と比較せられたる諸貨物の供給は、勞働の生産性が依然として變ぜしめらるゝことなき際に、同時に、勞働に赴く全收益の部分、若しくは、同樣なる事情の下に於いて、利潤率を決定しなければならぬ觀がある。(ibid., pp. 318-319.)。斯くて短期に對する外、價格に及ぼす需要及び供給の影響を拒否するに於いて、新學派に與する者は、全然此の原理の本質と其の作用の態樣及び範圍を誤解せるものである。而して需要供給原理の本質が正しく諒解せらるゝならば、獨占の場合に於けると短期間に對するの外、價値の決定に於ける這般の原理を拒否するは全然不當であること、並びに實際に於いて市場價格と自然價格の間に存する唯一の相違は、前者が需要及び供給の現實的一時的狀態によつて決定せられ、後者が其の更らに永續的にして普通の狀態によつて決定せらるゝの事實に存することが承認せられなければならぬ。(ibid., pp. 319, 320.)。

十

マルサスが特に經濟學の新學派を顯著ならしむるものとして考察せんとする第三の重要なる原理は、土地に於ける生産の困難を以つて利潤の調整者と做し、アダム・スミスによつて述べられたる原因、即ち資本の相對的夥多並びに競爭を全然排除することである。(ibid., p. 320.)。

『大英百科全書』補遺に於ける經濟學に關する論文の筆者は曰く「競爭の原理は斷じて利潤率に於ける一般的下降を生ぜしむること能はず」と。論者に從へば、競爭はあらゆる個人をして其の隣人に比してより高き利潤率を取得せしむることを抑制す可きであるが、而も何人も競爭が産業の生産性を減少するとは云はないであらう、而して利潤率が常に依存しなければならぬものは是れである。社會が進歩し、人口が稠密の度を加ふるに連れて常に生ずる利潤の下降は競爭に因るに非ずして、頗る異れる原因――社會の進歩と共に耕作せられなければならぬ土壤に於ける沃度の減少から、若しくは又、課税の增加から生じつゝある有利に資本を使用する力の減少に歸す可きである。論者は斯くの如くに說く。(Encyclopædia, op. cit., p. 296.)。競爭は産業の生産性を減少すること能はずと做すの所說に關しては、マルサスは立ち所に之れを承認するものであるが、而も彼れは利潤率が常に其の上に依存しなければならぬことを全然否認する。産業の生産性と利潤率との間には頗る頻々たる結合が存するが、而も疑ひもなく必然的結合は存することがない。利潤率は前拂ひを償ふが爲めに赴く全收益の部分の上に依存する、而も此の部分は産業の生産性が甚しく相違する際に於いて明かに同一なることがある可きである。而して實際上そが生産性の程度に從つて增減することの頗る稀れであることは、自然的沃度に於いて甚しく相違する通商的世界の種々なる國々に在つて、利潤率は保證の相違を差し引き、穀物賃銀の率よりも遙かに同一の程度大なるの事實から推して明かで

ある。(Quarterly Review, op. cit., p. 322.)。過去八九年間に生じた利潤の下落を土地に於ける生産の困難に歸することが可能であらうか。穀物が此の時期の最大部分を通じて常に低廉であつたことは周知の事實である、多數農民の資本は著しく損害を蒙つた、而して彼れ等は其の損失の爲めに、以前に等しき高き耕作狀態に其の地所を維持することを得なかつたと云ふのが一般の印象である。斯くの如き事情の下に於いて、又、勞働の貨幣價格下落と共に、新學派の教義は利潤が當さに昂騰す可きことを吾人に教へる。然しながら、事實は正さに反對であつた。又、這般の結果が特別のものであるとか、若しくは單に一時的のものであるとか稱す可き理由は毫も存することがないのである。(ibid., p. 323.)。

然らば、利潤下落の原因は何であつたか。そは明かに、又疑ふ可くもなく、必然生産せられたるものゝ相異れる分割を惹起し、而して勞働者には其のより大なる部分を、又、資本家には其のより小なる部分を與ふ可き資本の夥多及び競爭に基く收益の價値に於ける下落であつた。斯くて、吾人は土地の上に於ける勞働の生産性が殆んど變化することがなかつたに拘らず、勞働者は平常よりも大なる穀物賃銀を支拂はれたるの事實を看出すのである。(ibid.)。

英國に於いては利潤の下降せる二個の顯著なる實例がある、其の一は三十年間持續せるものであり、他は八九年に亙れるものであつて、孰れも殆んど全く土地の上に於ける生産の困難に歸せしめらるゝこと能はざるの觀あるものである。然しながら、兩實例は利潤に關するリカードオの更らに一般的なる命題、即ち是れ等のものは勞働に赴く全收益の部分によつて決定せらるゝと做すものと最も完全に一致する。是れ等二個の場合に於いて、勞働者が彼れの生産せる所のものゝより大なる部分を吸收せることは爭ふ可らざる事實であるが、而も是れ等孰れの場合に於いても增加せる穀物賃銀が勞働に對する增加せる需要に歸せしめらるゝことを得なかつた事實を注意するは至極重要なことである。普通の日傭勞働者の平均穀物賃銀が一日一ペック(約五升四勺餘)であつた第一の時期に於いて、恰も一千七百九十三年より一千八百十五年に亙つて存したと同一の勞働に對する需要が存し、又、充分なる仕事を看出すことが勞働者の妻子に取つて同樣に容易であつたとするならば、吾人は殆んど同樣の人口增加を來すことがなかつたであらうと想像するは全然不可能である、然るに一千七百二十七年から一千七百五十六年に亙つて人口が頗る遲緩なる增加を來し、一千七百九十三年から一千八百十五年に亙つて頗る急速に增加せることは周く知悉せらるゝ所である。平和回復後に於いて經過せる時期に於いて、仕事を看出すの困難——特に土地の上に——は證明を要するには餘りに顯著であつた、而して人口に對する前代の需要によつて是れに對して與へられた異常の刺激に由つて、そは猶ほ急速に增加の勢を持續するのであるが、而も尙ほ多幸なる對外商業の廣大なる新水路開始が英國政府の商業立法上に於ける進步せる意見と相結んで勞働に對する更新せられたる需要に對して道を供することがなかつたとしたならば、現在の需要は殆んど增加の率と步調を共にすることが出來ず、又、大窮迫は免れざる結果であつたらうと思惟す可き理由が存する。實際の所、穀物及び諸貨物の貨幣價値が最近九年間に於いて勞働の貨幣價格以上に下落せるの事實は遍く認められてゐる、而して商人は是れが爲めに彼れの使用せる勞作者等が其の生産する

貨物のより大なる部分を支拂はるゝを見るに拘らず、吾人は斯くの如きものが缺乏及び勞働に對する需要增加に基くのではなくして、產業のあらゆる部門に於ける資本の夥多及び競爭によつて生ぜしめられた生產せられたる貨物の夥多及び低廉に由ることを之れと同時に承認しやうとしない唯だ一人の純正なる實業家も存せざることを信ずる。(ibid., pp. 324-325.)。

本項の著者マカラックは全然「有效需要は生產に依存する」と做すジャン・バティスト・セイの「販路論」を受け容れ、一般的過剩の不可能なることを論證する。(ibid., p. 328.)。著者は曰く、あらゆる過剩に對しては、之れに相當する不足が存じなければならぬと。而もマルサスは之れに對して曰く、斯くの如きものにして何物かを意味するとしたならば、――そは、產業の一定部門に於いて分量の過剩に基ける收益の價値下落が生產者の殆んど總べての利潤を減失せしめるとしたならば、斯くの如きものは必然他の產業の部門に於ける收益の價値騰貴によつて伴はれ、是れ等のものに從事せる資本家に對して異常に高率なる利潤を與へざるを得ざることを意味しなければならぬのであるが、然も、一般的過剩が云々せられつゝある際に於いて、綿布業の狀態は慘憺たるものであるが、而も廣幅毛織物又は絹織物若しくは大資本を吸收す可き或る他の貨物の製造に從事せる資本家が最も繁榮にして隆盛なる狀態に於いて存し、而して高價格と高利潤とによつて附加的資本を招致しつゝあると云ふ主張に對して些かたりとも根據が存するや否やを問はなければならぬと。(ibid., p. 329.)。

利潤均等の學說は部分的過剩が長く持續し得ざることを吾人に敎へる。然しながら、倉庫が遍く充滿し、總べての業務に於いて急激にして異常なる利潤下落が存する際、即ち一般的過剩の場合に於いては、生產者は救濟せらるゝを得ない。總べての物品が相互に對して其の適當なる割合に於いて生產せられ、而して綿織物、毛織物、絹織物、金物等、等が正確に以前に等しき比率に於いて其れ等自身の間に於いて交換せらるゝと云ふことは此の場合に於いて殆んど何等の重要性をも有せざるものである。機械に於ける改良なくして、是れ等のものが總べて勞働と比較して下落したとするならば、必然一般的過剩のあらゆる情勢を以つて伴はれた利潤の一般的下落が存しなければならぬ。斯くの如きものがどれだけ長く續くであらうかは、之れを言明することが甚だ容易ならざる可く、そは全然有效需要者等の趣味と習慣並びに生產者等の辛抱と競爭とに依賴す可きである。然しながら、這般の事態は供給と比較せられたる需要の狀態を變ずるによつて、資本の巨大なる額を吸收し、收益の價格を引き上ぐ可き貿易の新たにして大なる水路の開通によつて、直ちに終熄せしめらる可きである。然しながら、其の存續しつゝある時期を通じて、勞働者に對して與らるゝ收益の大なる部分が必ずしも勞働に對する增加せる需要を必要ならしむることなかるべきは明かであり、又勞働者に對して與へられつゝあるより低廉なる貨物のより大なる數量が勞働の增加せる價値を包意しないであらうことも亦、等しく明かである。(ibid., pp. 330-331.)。

十一

マルサスは「經濟學の新學派」をアダム・スミス及びマルサスの其れより區別する主たる相違點を以上三個の根本原理に置いたのであるが、而も彼れは是れ等の相違點を猶ほ一層集中せしむるを得可しと思惟した。新學派の總べ

ての特有なる學說は是れ等新原理の第一のものから直接且つ必然に發出せるものであると稱して誤りではあるまい。即ち諸貨物の交換價値は是れ等のものゝ中に費されたる勞働の定量によつて決定せらるゝと云ふ原理からして、供給と比較せられたる需要も、資本の相對的夥多及び競爭も、孰れも價値及び利潤の上に單なる一時的影響以上のものを有すること能はずと做すの論は直接且つ必然に生ずるのである。(ibid., pp. 331-332.)。

斯くの如きものは經濟學に於ける主要なる研究の對象、即ち富の增加を奬勵し若しくは阻止する諸原因に關して兩學流の間に强く劃されたる分界線を引くものである。兩學流に在つて、是れ等のものが主として利潤の狀態に依存することが認められる。然も、新學派は勞働の同一量によつて取得せられたる貨物の集團は常に實質上同一價値を持續すること、並びに利潤の變化は此の勞働の同一量の價値に於ける變化によつて決定せらるゝことを想定し、之れに反し、アダム・スミス及びマルサスは勞働の同一量の價値が實質上依然として同一なること、並びに利潤の變化が勞働の同一量によつて生產せらるゝ貨物の價値に於ける變化によつて決定せらるゝことを想定する。前者に於いては、勞働の變化しつゝある價値、又、後者に在つては、勞働の收益の變化しつゝある價値が、富の進步に於ける偉大なる致動原理と考へられる。本項に於ける經濟學に關する最初の解說に從へば、斯學は「思辨の學ではなくして、事實と經驗の其れである」が故に、特有なる問題は、委に述べられた二個の意見の何れが最も能く吾人が是れ迄に經驗を有して居つた顯著にして確實なる諸事實を說明するかと云ふことである。而してマルサスは何等遲疑する所なく、英國に於ける過去三十年の出來事は、勞働の同一量によつて生產せられた貨物の集團が此の時期を通じて依然同一の價値を維持すると云ふ想定に基いては絕對に說明せらるゝこと能はざるの觀があるが、之れに反し、勞働の同一量の收益の價値が戰時に於いて騰貴し、而して其の後、需要及び供給の狀態並びに此の二期間に於ける資本の相對的夥多及び競爭の狀態に由つて低落せることをあらゆる情勢に從つて承認するによつて是れ等のものは最も明晰にして最も顯然たる態樣に於いて說明せらるゝと答ふのである。(ibid., pp. 332-333.)。

斯くの如き命題は如何なる點に於いても、勞働の節約、改良せられたる機械の使用、及び租稅若しくはあらゆる他の出費の減少から生ずる價格の下落に基く甚大なる利益を非議するものではない。斯くの如き改良は、生產せられたる物品の或る特殊の數量の價値を低廉ならしむるものではあるが、それ勞働の同一量の收益の價値を引き上ぐる强い傾向を有する。而して這般の傾向は唯り短期間に對し、若しくは特殊の事情の下に於いてのみ有效でないことがあり得るのである。勞働及び其の他の出費の節約から生じつゝある頻々たる價格の下落は殆んど常に有利であるが、斯くの如き原因から生じつゝあるものではなく、需要及び供給の狀態に基く頻々たる價格の下落は屢々有害である、富の急速なる進步が持續するは、勞働の收益が同時に資本家及び勞働者の兩者に對して最も有利であり、而して資本の定量及び價値並びに人民の數を最も急速且つ確實に增加す可き割合に於いて是れ等兩者の間に其の分割を行はしむる底の價値のものたるに依存する。(ibid., p. 333.)。

マルサスは經濟學の新學派の體系を以つて頗る酷く佛蘭西「經濟學者」即ちフィジオクラァトの其れに類似するものと觀る。佛蘭西「經濟學者」特有の誤謬は、製造業及び商業の結果を包含しない程、富と其の泉源に關して限定

せられた見解を採つたことであつた。英國新學派特有の誤謬は、需要及び供給の結果、並びに資本の相對的夥多及び競爭の其れを包含しない程、價値に關して限定せられた見解を採つたことである。アダム・スミス及びマルサスの價値の尺度、即ち一貨物が支配す可き勞働が、新學派によつて採用せられた尺度、即ち一貨物中に費されたる勞働に優越する明確なる理由は、前者が需要及び供給並びに資本の競爭の諸結果を包含し、而して後者が是れ等のものを排除することである。事實と經驗とは、數年を經過する中に、漸次佛蘭西の經濟學者等を不當にして適用し難いケネーの理論から、より正しくしてより實際的なるアダム・スミスの理論に轉向せしめた、而してマルサスは、等しく根本的にして重要なる誤謬が、佛蘭西經濟學者の體系に於けると等しく、英國に於ける新學派の體系に包含せらるゝことを充分に悟了するが故に、彼れは、同樣なる原因が、軈がて、誤謬の是正と眞理の確立とに於いて、同樣の結果を英國に於いて生ず可きことを希望し期待せざるを得ずと論結する。(ibid., pp. 333-334.)。

エムプサン教授(William Empson)は The Edinburgh Review, or Critical Journal. に掲げたるマルサスの「經濟原論」第三版の評論中に於いて、マルサスは此の The Quarterly Review. 所載の評論を以つて、彼れが嘗つて經濟學に於いて爲した最良なるものゝ一と考へたと記してゐる。(The Edinburgh Review, op. cit. p. 496.)。

十二

終りに臨んで、吾人は以上吾人の所論を要約する。

マルサスは、更らに良好なる平等と更らに良好なる富の分配とを有する完全なる政治は果して此の世界に確立せられ得可きものであるか如何かを疑ひ、人口は不平等が再現し、困苦が再襲するに至るまで增加す可きことを看出せるロバート・ワルレスの先蹤に從つて政治論壇に登り、而してウイリアム・ゴッドウィン及びコンドルセー等の政治的理想主義者を排擊せんとした。而して彼れは是れ等の平等主義者を攻擊するが爲めに主張せる彼れの理論の殆んど總べての要素を其の論敵其の人から借用した。而して『人口論』再版以後に於ける倫理的抑制の導入は、彼れと其の論敵との間の溝渠を著しく狹めた。マルサス以後に於いて、農業技術の改良、交通機關の發達は、生活標準の上昇に伴べる出生率の下降と相俟つて、彼れの理論の重要性を喪失せしむるに資するものがあつた。彼れの人口理論を悉く承認し、其の上に分配理論を建設したリカードオ學派は極めて危險なる針路を經濟學に與へたものであつた。マルサスの後の讓步がより眞實であるとするならば、分配論は說き改められなければならぬ。而して斯くの如きものは、英國に於いては Two Lectures on the Checks to Population, delivered before the University of Oxford in Michaelmas Term 1832, 1833; Four Lectures on Poor Laws, delivered before the University of Oxford in Michaelmas Term 1834, 1835; Two Lectures on Poor Laws, delivered before the University of Oxford in Hilary Term 1836, 1837; Two Lectures on the Justice of Poor Laws, and one Lecture on Rent, delivered in the University of Oxford in Michaelmas Term 1836, 1837; Lectures on Population, Value, Poor Laws, and Rent, delivered in the University of Oxford during the years 1832, 1833, 1834, 1835, and 1836, 1837. の著者ウイリアム・フォスター・ロイド(William Foster Lloyd)、On Political Economy, in connexion with the Moral

State and Moral Prospects of Society, 1832. の著者トーマス・チャルマーズ(Thomas Chalmers)、The Social System; A Treatise on the Principle of Exchange 1831. の著者ジョン・グレー(John Gray)、及び Principles of Political Economy, deduced from the Natural Laws of Social Welfare, and applied to the Present State of Britain, 1833. の著者スクロープ(G. Poulett Scrope)、佛國に於ては Nouveaux Principes d'Économie Politique, ou de la Richesse dans ses rapports avec la population, 1819. の著者シスモンディ(J. C. L. Simonde de Sismondi)、而して米國に於ては Principles of Social Science, 1850-1860. の著者ケーリー(Henry Charles Carey)の如き人々の抗論の結果であつた。人口法則は最早ナッソー・ウイリアム・シイニオア等の認めたが如く、一切所要の推論を悉く引き出し得る經濟學究竟命題の一たるを得ざるものと爲つた。(Senior, Political Economy, 3rd ed., 1854, p. 29.)。而も「人口が生存資料よりも急速に増加するは、概して言へば、秕政の徴候であつて、そが單に其の結果の一たるに過ぎざる更らに根深き害悪を指示しつゝある」と稱した者は、實にシイニォア其の人であつた。(ibid., p. 49.)。

現代の經濟學はリカードオ學派が無條件的に承認した彼れの人口理論よりも、却つて其の受け容るゝ所と爲らなかつた彼れの價値學説其の他に負ふ所の大なるものである。彼れはリカードオ學派の根本原理を以つて、諸貨物の交換價値は是れ等のものゝ中に費されたる勞働の定量によつて決定せらるゝと云ふに在りと觀た。而してマルサスは、交換價値の本原的原理を以つて、需要供給の法則であると做した。勞働價値説が資本主義的經濟制度を敵とする者の間に地歩を占め、彼れ等の主張に對して「科學的」基礎を與ふるものと爲れるに對し、著々として英國經濟學に於いて優勝の地位を占むるに至れる需要供給學説の歴史は實に彼れを以つて始まれるものである。

（昭和九年十二月稿）